

産湯相承事（お誕生会法要）

日興之れを記す

御名乗りの事、始めは是生、実名は蓮長と申し奉る。後に日蓮と名乗り有りし志真に神妙なり、一閻浮提第一の宝を与へんと思ふなり。東条の片海に三国大夫と云ふ者あり、是を夫と定めよと云云。七歳の春三月廿四日の夜なり、正に今も覚え侍るなり。我父母に後れ奉りて已後、詮方無く遊女の如くなりし時御身の父に嫁げり。有る夜の靈夢に曰はく、叡山の頂に腰をかけて近江の湖水を以て手を洗ひ、富士の山より日輪の出でたまふを懐き奉ると思ふて、打ち驚きて後月水留ると夢物語を申し侍れば、父の大夫我も不思議なる御夢相を蒙るなり。虚空藏菩薩貌吉児を御肩に立て給ふ。此の少人我が為には上行菩提薩埵なり。日の下の人の為には生財摩訶薩埵なり。亦一切有情の為には行く末三世常恒の大導師なり。是を汝に与へんとの給ふと見て後、御事懷妊の由を聞くと語り相ひたりき。さてこそ御事は聖人なれ。

又產生たまふべき夜の夢に、富士山の頂に登りて十方を見るに、明らかなる事掌の内を見るが如く三世明白なり。梵天・帝釈・四大天王等の諸天悉く來下して、本地自受用報身如來の垂迹　上行菩薩の御身を凡夫地に謙下したまふ。御誕生は唯今なり

（一七〇八頁）

本日は宗祖日蓮大聖人の御誕生会を奉修致しました所、お寒い中、又お忙しい中にもかゝわりませず、多数御参詣下さいまして御報恩の誠の一分を尽くす事が出来まして、有難く、衷心より厚く御礼申し上げます。

日蓮大聖人の御誕生につきましては毎年の事でありますから、既に御一同様には十分に御承知の所とは存じますが、只今の御文に因みまして少々御法話申し上げます。

先ず第一に、日蓮宗と名乗つてゐる他の日蓮門下に於ては、大聖人はお生れは凡夫で、竜の口の御法難で初めて凡夫日蓮が上行菩薩として、発迹顕本したと、このように主張していますが、しかし、我が日蓮正宗では只今拝讀した最後の所に「本地自受用報身如來の垂迹、上行菩薩の御身を凡夫地に謙下したまふ。御誕生は唯今なり（梵天王、広目天王、持國天王その他諸天王等も来集されている所に、本地自受用報身といふ御本仏が本地より垂迹され、上行菩薩の再現として、凡夫の身となられ、降下されます。只今御誕生になります。）（五七九頁二行目）とありますように、貞応元年「本因下種受用報身如來の垂迹、上行菩薩の御身が御誕生遊ばされた」と日興上人は御指南遊ばされていります。

そしてこの上行菩薩が竜の口にて（開目抄・五六三頁十行目）「日蓮といふし者は、

去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ。此は魂魄佐土の国にいたりて」とこゝに上行菩薩の迹を払つて、久遠元初、下種本因妙の教主と、その本地を顯わされるのであります。即ち「日蓮は日本國の諸人に主師父母なり」（五七七頁）と開目抄にあります。

この貞応元年二月十六日のお誕生を、上行菩薩の誕生として、竜の口に於いて本仏の本地を開顯されたのだとする所が、他門と違う日蓮正宗の実教実宗たる根本義であります。日蓮大聖人は正像脱益の仏が、三十二相八十種好の尊形仏たる所から、王家の出生を取られたとし、それに對して末法の仏は、和光同塵の凡夫僧として、最下層の旃陀羅の家より出生されました。

こゝを本尊問答抄（一二七九頁）には「日蓮は東海道十五箇國の内、第十二に相當たる安房國長狭郡東條郷片海の海人あまが子なり」と明かされ、更に、佐渡御書（五八〇頁）には「日蓮今生には貧窮下賤の者と生まれ旃陀羅が家より出でたり」と述べられているのであります。

大聖人はこのように尊い仏様の御姿の御威光を和らげて、衆生教化の為に卑しい家に生れ合わせ、示同凡夫、と云つて私達と同じ凡夫のお姿。凡夫僧の身をもつて一切衆生をお救い下さるのであります。

そしてこの産湯相承（五七九頁）には「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子、唯我一人能為救護と、唱え奉ると見て驚けば、即ち聖人出生し給へり、毎自作是念以何令衆生、得入無上道速成就仏身と、苦我と滯き給う（人間といわず、天界といわゞ、畜生といわゞ、皆一切の生類が、白蓮華を手に捧げ持つて、太陽に向つて、今此の三界は皆是れ我が有なり、其中の衆生は悉く是れ吾が子なり、而るに今此の處は諸の患難多し、唯我れ一人のみ能く救護を為す、と唱え奉る姿を見て驚いて夢が醒めました。その後あなた（大聖人）が産れたのです。そして産れたその時、「常に自ら是の念を作さく、何を以てか衆生をして、無上道に入り、速に仏身を成就することを得せしめんと。」と唱え給い、『苦我』と囁き給われました。）とあります。

普通の赤ん坊は皆「オギヤー、オギヤー」と云つて生れます。即ち、この娑婆世界に生れて、苦しみの人生を恐ろしいと云つて、ギヤーと悲鳴を上げるその心は「オ一こわい、オ一こわい」であり、「オギヤー、オギヤー」と泣くのであります。

而るに、日蓮大聖人はこれを御義口伝（一七七一頁）に「一切衆生の異の苦を受くるは悉く是日蓮一人の苦なるべし」と申されているように、此の娑婆世界、一闇浮提の一切の衆生を救う御本仏として、そういう一大事の因縁のもとにこの日本国安房小湊に、御本仏として御誕生遊ばされたと拝する所が他の門下と違う所であります。

又、諫曉八幡抄（一五四三頁）「扶桑國（中國の東方にあるといふ國の名前）をば日本國と申す、あに聖人出で給はざらむ。月は西より東に向へり、月氏の仏法、東へ

流るべき相なり。日は東より出づ、日本の仏法、月氏へかへるべき瑞相（きざし、前知らせ）なり。月は光あきらかならず。在世は但八年なり。日は光明月に勝れり、五五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり」とあります。この、「あに聖人出で給はざらむ」とは日本国と云うよき名の国に、どうして仏が出現しない筈があろうか、日は東より出ずとは、太陽は東の国、日本より登り世界を照らします。この太陽とは仏の事であります。

「名は体を顯わす」といいますが、大聖人様の「日蓮」の日文字の因縁とはこの国を日本、その大氏神は、天照らす大神の「日の神」、また釈尊の童名は「日種太子」であります。そして大聖人の幼名は「善日麿」であり、長じて「是生房蓮長」と名乗られますが、是生房の是の字を分析しますと、「日の下の人」であり「日の下」に生れる人であります。そして日蓮と名乗られたのであります。

寂日房御書（一二九三頁）には「一切の物にわたりて名の大切なるなり。さてこそ天台大師、五重玄義の初めに名玄義と釈し給へり。日蓮との事自解仏乗とも云ひつべし。かやうに申せば利口げに聞こえたれども、道理のさすところさもやあらん。経に云はく「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の世人間に能く衆生の闇を滅す」と此の文の心よくよく案じさせ給へ。「斯人行世間」の五つの文字は、上行菩薩末法の始めの五百年に出現して、南無妙法蓮華経の五字の光明をさしいだして、無明煩惱の闇をてらすべしと云ふ事なり。日蓮等此の上行菩薩の御使ひとして、日本国的一切衆生に法華経をうけたもてと勧めしは是なり。此の山にしてもをこたらず候なり。今の経文の次下に説いて云はく「我が滅度の後に於て応以此の経を受持すべし。是の人仏道に於て決定して疑ひ有ること無けん」云々。かゝる者の弟子檀那とならん人々は宿縁ふかしと思ひて、日蓮と同じく法華経を弘るべきなり。法華経の行者といはれぬる事不祥なり。まぬかれがたき身なり。」と仰せであります。

解り易く申しますと、およそ一切の物にわたつて『名は体をあらわす』といつて名前は最も大切なものであります。それ故に天台大師は諸経を解釈するのに、名・体・宗・用・教の五重玄義（五つの面から解釈したもの）を立て、その第一に名玄義を解釈しているのも、いかに名前が大切であるかを示されているのであります。

私が日蓮と名乗つたことは自解仏乗（師匠から教えを受けることなく、自ら法華経の義を悟ることをいう、自ら仏の境界を解ること）とも言うべきであります。即ち、大聖人様は自ら久遠元初自受用報身の再誕であることを覚られたが故に「日蓮」と名乗られたのであります。このように言ふと、世間の人は賢ぶつているように思うかもしないが、道理の示すところそういうこともあるであります。

又、法華經神力品第二十一に「日月の光明が能く諸の幽冥を除くように、斯の人は世間に行じて能く衆生の闇を滅する」と説いてありますが、この経文の意を考え

なさい。要するに「斯人行世間」の五つの文字は、まさに本化の上行菩薩が末法の始めの五百年に出現して、日月の光明の如くに南無妙法蓮華経の五字・七字の光明をさしいだして、一切衆生の無明煩惱の闇を照らすという事です。いま日蓮が上行菩薩の御使いとして、先ず日本国的一切衆生に法華経を受け持つようにと勧めてきたのはこの経文の心に応ずるものです。それ故、この身延の山に入つてもこの南無妙法蓮華経の修行は決して怠つてはいないのである。日本国的一切衆生が妙法を受け持つまではこの戦いを続けるのです。そしてこの経文の次下(すぐ後の部分)に「我が(釈尊)滅度の後においては、上行菩薩に結要付嘱された法華経(南無妙法蓮華経)をこそ受持すべきであり、この人は仏道において成仏することは疑いのないところである」と説かれています。このような上行菩薩の再誕(内証の辺は久遠元初の自受用報身如来)である日蓮の弟子檀那となつた人々は、今世たゞでなく久遠の昔よりの宿縁が深いと思って、日蓮と同じように法華経の会座においても、地涌の菩薩の上首・上行菩薩の眷属として、末法に法華経を弘通するという使命を誓い付嘱を受けているのであるところから、このような深い宿縁があると自覚して、不退の精神で日蓮(大聖人)と同じく法華経を弘通していきなさい。末法五濁の世の中に於て法華経の行者といわれて何の罪もないのに法華経を持つたが故に種々の迫害に遇うことは不祥なこと(法華経の行者となつた以上は避けられないこと)であり、これはもう仏法の為の難であり、まぬがれることのできない身である、と云う意です。

今、皆様方は、折伏を受けて日蓮大聖人の正法を正しく伝持している日蓮正宗に縁を結ばれ、そして「広宣流布と即身成仏」の大功德を積む道を教えられ、教えのままに信行に励んでおられる訳であります。この事を正しく教えていのは日蓮正宗を指して外にはありません。そして、日蓮大聖人を御本仏と仰ぎ奉り、その御当体が本門戒壇の大御本尊にましまし、この御本尊様を受持して一心に南無妙法蓮華経と「我もいたし人をも教化候へ」(六六六頁二行目)と修行出来るのは、今日我が日蓮正宗だけであります。

この日蓮正宗に伝わる三大秘法は、他門他宗に類を見ない超八(八教を越えるという意)、獨一の大仏法である事を誇りとして、また大聖人の弟子檀那として、御法主上人猊下のもと一糸乱れない広布の大道を三類の強敵を前に少しもひるむ事なく堂々と歩んで、現当二世の大願を成就していただきたいと思います。そして「大願とは法華弘通なり」(御義口伝・一七四九頁)と仰せのように、二月の信行を折伏弘教の一点に集中して御精進戴きたいと思います。以上。

(令和七年一月十六日・宗祖日蓮大聖人お誕生会の砌)